

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBLなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎月テーマとなるブランドを取り上げていこう。今号はマッキントッシュの初期モデルをご紹介していこう。

Mcintosh Laboratory

1974年にFrank H. McIntoshとGordon GowによってMcintosh Laboratoryとして設立された。1949年頃に開発された第1号機のパワーアンプ 50W-1 は市場では高出力ながら低歪みであった事が話題となり、その後の改良型の50W-2、A-116が業務用途を主に活躍していた。今ではMcintosh はガラスパネルとイルミネーションが輝くデザインが有名だが、当初は業務用がメインという事でパワーアンプは全てハンマートーン塗装で仕上げられていた。また、プリアンプ等もAE-1C、104、C-8と次々と開発され、1954年頃にはコンシューマー向けのMC-30、MC-60、1957年には当社初のモノラルFM/AMチューナーMR-55が発売され高品質な総合アンプメーカーとなっていった。

本文 / 田中伊佐資

製品解説 / 岡田康司(アトリエJe-tee代表)

撮影 / 小林新彦(彩館舎)



50W-2

1951年頃に開発され、当社の実力を高い次元で安定させたモデル。出力管に6L6が2本、電源部の整流回路に5U4Gが2本搭載され、当時は他社でも歪みの少ない業務用アンプは25W出力が最高のところ50W出力が可能なアンプであった。パワー部とアウトプット部の干渉を防ぐために独立している構造で、現在のハイエンド機では珍しくないが、当時すでにこの構造が用いられ、また同社が特許を持つパイファイバー巻トランスとユニティカップドサーキット回路が当時50Wという高い出力にもかかわらず歪み率0.5%以下を実現した。



C-4

1954年にそれまでのプリアンプとデザイン一新され発売されたプリアンプでオーディオコンベンセーターという名称であった。電源部を持たずパワーアンプとの接合によって電源を供給されるのが基本動作になっていたが、同時にC-4Pという電源を持つ製品もあった。コントロールつまみは5個付属しており、先に開発されていたC-104の後継機種という存在であるが、C-104には搭載されていなかった11段切り替えのレコード用のイコライザーであるCompensatorsつまみが搭載され、より繊細なイコライザー補正が可能になった。



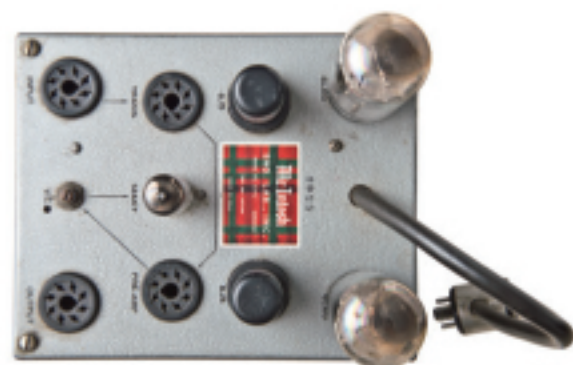
C-8

1955年に先に開発されたC-10Bの後継機としてプロフェッショナルオーディオコンベンセーターという名称で発売される。こちらも電源部を持たないC-8と電源部を持つC-8Pがあり、その後1959年頃にステレオ再生に合わせてP-8Sが発売され、C-8とのセットでボリュームがステレオコントロールできるようにする。特徴はC-10Bにも搭載されていたイコライザーの補正スイッチである高域用のロールオフが5個、低域側のターンオーバーが5個搭載され、高域/低域のトーンコントロールを組み合わせると1024通りの補正が可能であり、レコード再生をきめ細かくコントロールできるプリアンプとして現在でもアナログマニアの中では重宝されている。

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

Mcintosh Laboratory



50W-2のアウトプット部。出力管に6L6が2本搭載し、50Wの出力が可能



50W-2のパワー部。電源部の整流回路には5U4Gを2本搭載。特許を持つパイファイバー巻トランスとユニティカップドサーキット回路により、歪み率0.5%以下を実現



マッキントッシュの出自であるスコットランドのタータン・チェックをイメージしたロゴマークが印象的



パワー部とアウトプット部は干渉を防ぐために独立構造となっている

望郷の念を込めたタータンを纏う マッキン観が変わった初期モデル

この連載もいつのまにか6年目に突入しているが、ほんとうにB.L.アルテック、マランツ、マッキントッシュなどのド真ん中メインストリーム系ヴィンテージが出てこない。

これについて、反骨精神が旺盛なアトリエJe-teeの岡田さんは「そんなのありふれていて、面白くないでしょ」という弁だ。

しかし今回はマッキントッシュだ。おやと思ったが、主役をはるパワーアンプ50W-2のラベルを見ながら「なにしろタータン・チェックですからね」と一目置いていた様子なのだ。確かに赤地に緑のチェックが入った柄になっている。

なんのことも思ったら、創業者のフランク・H・マッキントッシュはスコットランドの移民、それゆえこのタータンは故郷をシンボライズしているというのだ。ウォーカーのショートブレッドが食べたくなってきたところで、急にほくのマッキン観が変わった。マッキンといえどマツコな黒ボダイに碧眼メーカー。望郷の念を込めたタータンはずっと残しておいて欲しかった。

パワーの相方となるプリアンプはC4。それと少し新しくなる(といっても50年代)C8。どっちのプリにしても、パワーが珍しいためこうしてペアで店先に出るのは異例で、オリジナル周期並みのタイミングなんだぞうだ。

完全モノラル。カートリッジはGEバリレラ、プレーヤーはRCA70D、スピーカーはジェンセンのインベリアル一発。まずはヘレン・メリルのエマシー盤から、皆さんご存知「ユード・ビー・ソー・ナイス・トゥ・カム・ホーム・トゥー」。54年録音だからアンプの製造時期とたいたい合っている。C4で聴くと色気ムンムンで濃すぎるくらい濃い。ほんまに20代前半の声ですか？という感じ。ともあれパワーアンプの駆動力はかなりのものだ。

となると和ポップスはいかにと「ザ・ビーナッツ・ヒストリー・ヴォー」から、「情熱の花」をかけてみる。ヘレンのパターンでいくとビーナッツが変にパター臭くなってもおかしくないが、切々とした二人のハーモニーはきれいに伸び、エネルギーみなぎる昭和録音を感じた。

プリをC8に変え、そのままビーナッツ。ノスタルジックな陰影が消えてスケがよい。設計を20年くらい新しくしたよう。イコライジングのスイッチをパチパチ変えると面白いように音が変わる。

続くヘレン・メリルは脂っ気が抜けて若返った。バリッとしたライになった。岡田さんは「こっちもいいかも」とスピーカーをオールド・インベリアルに変えた。妖艶に迫ってくるヘレンならこれでキマリだ。呑み込まれるかのようにスピーカーへ接近して、同軸2ウェイに顔を付き合わせて、聴き惚れた。

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBLなどが話題に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。今号も前号に続き、マッキントッシュの初期モデルを紹介していこう。



本文/田中伊佐資
製品解説/岡田金司(アトリエJe-tee代表)
撮影/小林幹彦(彩虹舎)

■ 24冊 Mcintosh Lab. / Western Electric co.

前回ご紹介した ハンマートン塗装のパワーアンプ 50W2 から今回ご紹介する MI-60、MI-75、MI-200までが Western / McIntosh アンプ と呼ばれ、他の McIntosh アンプとグレードが異なります。Western Electric co.は1930年代より最先端の技術力により、アメリカ西海岸で業務用アンプを開発。同社は1950年代頃からアメリカ全域そして世界各国に高品位アンプを供給して行くことになり、McIntosh など高性能なアンプを生産できるアンプメーカーがそれらを Western Electric のOEMで生産していた。



MI-60

1954年頃に開発されたプロ用ラックマウントモデルでハンマートン塗装になっている。こちらは当時録音スタジオや音楽ホールなどに配備されていた。その後、コンシューマータイプのMC-60が開発され、デザインも一新され、一般ユーザー用に販売される。両者ともに搭載されている真空管は 6550X2、5U4G X2、12AX7、12AU7、12BH7と同じ構成となるが、トランスのグレードやシャーシの設計がかなり違っている。ちょっとドンシャリ気味のMC-60のサウンドと比べると、こちらのMI-60はより高域が滑らかで中低域が分厚く明快なサウンドでなっていて、まさにWestern Electricのサウンドを引き継いだアンプとなっている。

MI-60の正面パネル。中央に電源スイッチと出力ボリューム、ヒューズホルダーがマウントされている



真空管側の写真。ウエスタンタイプの角形トランスの間に真空管がレイアウトされていて600Ω用のインプットトランス用、ライトランス用のソケットが用意されている



Mcintosh MI-60の型番と製造工場の住所が記載されている

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

Mcintosh Lab. / Western Electric co.

黒くないマッキントッシュが再び登場 年代違いの2モデルを聴き比べる

黒光りするマッキントッシュもいろいろ、ハンマートン塗装のマッキン、これもまた音も含めてよろしいなあと思つたのが前回。

さて今回もまた黒くないのが出てきた。しかも2セットもある。パワーアンプのMI-60とMI-75。

見60は1950年代初期から中期、その後引き継いだ第75は60年代の頭まで作られたらしい。ともに風貌はいかにも業務用らしく、見事に素っ気ない。しかし佇まいに、ヴィンテージ製品によく見受けられる感じのない威圧感がある。本気を出すところ、顔にかいてある。さっそくコレクトレーンの「ブラード」をRCAの業務用プレーヤーの載せて聴き比べを始める。スピーカーはジェンセンのインベリアだ。

まず60で鳴らしたとき「ああ、もうこれで決まった」と開始早々で、なんかもうぜんぶが終わったような感じがした。プフォーと飛び出たサクサクが、丸みを帯びた厚みがある。結構なアメリカン・サウンドだった。

ほとんどで切り上げて、すぐに75をつなぎ、同じ曲を聴く。基本のトーンは同種だが、こちらは輪郭がクッキリして前に向かって切り込んでくる。低音もよく沈み分解能も高い。より新しい音になった……と言いたいが、これだつて半世紀以上前の製品だから、新しいというよりモダンになったというべきだろう。

60は設計者の個性が出たコンシューマー的だったのに対し、75はより原音に忠実な再生を目指し、業務用として精度を上げたように感じた。だからメーカーとしての歩みはこれで正しい。ところがどっこい、今これをどこかのスタジオで使おうという話ではないのだ。音楽を鑑賞するにはどっちがいいか、である。

レコードはがらりと変わり、オーディオ指揮イングリッシュ・パロック・ソロイストらによるパーセルの歌劇「インドの女王」。60は弦に張りがある、気持ちよく浸れる。75は弦の重なりがよく見えて生っぽい。どっちも捨てがたい魅力がある。

判断に困ったときは「声」に限る。ローラ・ニーロのR&Bの名曲のカヴァー集「ゴナ・テイカ・ア・ミラクル」をかける。60は声がかくよか時代の際開きがよく出る。75は、そのふくよかさには余分なふくらみですと指摘するかのよう、カラッとよく抜けている。歌そのものが泣けてくる60を買ったとしても、オーディオ好きが音質を頭をもたげてきて、75に近づこうとする努力が始まる予感がある。だったら75を最初から買えばいいが、60のちよつとした味わいは75にはない。

さて、結局ですね、私は買えるだけの資金をまったく持ち合わせていないのですが、なぜか妄想してしまっただけです。どっちも素晴らしいので。



MI-75のフロントパネル。左側に電源スイッチと出力ボリューム、ヒューズホルダーがマウントされている



真空管側の写真。トランスのカー形状と真空管レイアウトはMC-75タイプと同じ、スピーカー端子、入力用端子もこちら側にレイアウトされている



Mcintosh MI-75の型番と製造工場の住所が記載されている